

馬産地ライター村本浩平の 2023 スタリオンシリーズ競走種牡馬名鑑



Vol. 4 | 10.5 [木] ▶ 11.9 [木] 開催分

10.5 サンダースノー賞 [木] 【ネクストスター門別(H1)】

サンダースノーは2014年産まれの鹿毛馬で、2020年シーズンから日高町・ダーレー・ジャパン スタリオンコンプレックスで繋養されています。現役時は2歳から5歳までの全ての年齢でGIを優勝。勝ち鞍も芝1400Mのクリテリウムアンテルナショナルから、史上初の連覇を果たしたダート2000MのドバイワールドCまで、オールマイティな舞台で活躍を見せていました。初年度産駒は今年デビューを迎えており、ホッカイドウ競馬のフレッシュチャレンジ競走に出走したスノークローバーが、この世代の初勝利をあげています。今後もデビューを重ねていく産駒からは、父と同様に芝の活躍馬も現れてくることでしょう。

10.11 ニューイヤーズデイ賞 [水] 【ブロッサムカップ(H2)】

ニューイヤーズデイは2011年産まれの鹿毛馬で、2020年シーズンから安平町・社台スタリオンステーションで繋養されています。現役時は2歳時に3戦2勝ながらも、BCジュヴェナイルでGI初勝利をあげています。現役引退後はアメリカで種牡馬入りすると、2世代目産駒のマキシマムセキュリティが、フロリダダービーを含めてGIを4勝する活躍で、父の評価を一気に高めました。日本での初年度産駒となる2歳世代からは、ベストオブユーがメイクデビュー新潟を優勝。南関東でもスピニングガールが南関東の新馬戦に続いて、ニューホープ特別も快勝と、芝、ダートの双方で勝ち馬を送り出しています。

11.3 パイロ賞 [金・祝] 【JBC2歳優駿(JpnⅢ)】

パイロは2005年産まれ黒鹿毛馬で、2010年シーズンから日高町・ダーレー・ジャパン スタリオンコンプレックスで繋養されています。現役時はGIフォアゴースに優勝するなど、17戦5勝の成績を残したのち、日本で種牡馬入り。初年度産駒の活躍もあって、NARのファーストシーズンサイアーに輝きます。その後も産駒たちはダートを中心に活躍を続けていき、2021年にはミュウチャリーがJBCクラシックを優勝して、産駒では初めてのGI級競走制覇を果たします。2022年と2023年の帝王賞では、メイショウハリオが史上初となる連覇を達成しました。今年のNARサイアーランキングでは3位となっています。

11.8 ファインニードル賞 [水] 【道営スプリント(H1)】

ファインニードルは2013年産まれ鹿毛馬で、2019年シーズンから日高町・ダーレー・ジャパン スタリオンコンプレックスで繋養されています。重賞初制覇がデビュー21戦目のセントウルSとなったものの、そこから遅咲きのスプリンターとしての能力が開花します。次の年には高松宮記念、スプリンターズSの両スプリントGIの優勝を含め、史上初となるスプリント重賞で4勝をあげます。初年度産駒は昨年デビューを果たしており、ウメムスビ、クルセイロドスルと2頭のオープン勝ち馬を誕生させています。産駒も父と同様に芝スプリントでの活躍が目立っており、父仔スプリントG1制覇の期待も膨らんできます。

11.9 ルーラーシップ賞 [木] 【道営記念(H1)】

ルーラーシップは2007年産まれ鹿毛馬で、2013年シーズンから安平町・社台スタリオンステーションで繋養されています。母と祖母がGI馬かつ、父はリーディングサイアーのキングカメハメハという良血馬が、GI制覇という大輪の花を咲かせたのは、5歳時の香港Qエリザベス二世Cとなります。その後、出走した国内のGIでは掲示板を外さない安定したレースぶりで、6歳時からスタッドイン。初年度産駒から菊花賞馬のキセキを送り出し、昨年もドルチェモアが朝日杯フューチュリティSを優勝。昨年の総合サイアーランキングでも8位となるなど、キングカメハメハの後継種牡馬としての礎を築きつつあります。

「スタリオンシリーズ競走」は、一般社団法人JBC協会(ジャンブリーダーズカップ協会)が産地の支援を得て、優勝馬の馬主や生産牧場に種牡馬の翌年種付権利を副賞として贈呈する競走です。

※生産牧場が海外の場合は付与対象外となります。

